

加島屋「妙意仮名消息」

連続テレビ小説「あさが来た」の源流

一 はじめに

みなさんは、二〇一五年度後半期の連続テレビ小説「あさが来た」のヒロインの嫁ぎ先「加島屋」のモデルとなったのが「加島屋」という、大坂の大豪商であったことをご存知でしたでしょうか。さらに加島屋が真宗門徒であったことはどうでしょうか。

加島屋は三井家・鴻池家と並び称された、両替商兼米問屋を営んだ大坂の大商人です。初代は大坂御堂前に店を構え、のちに玉水町（大阪市）へ移転しました。

加島屋創始者は廣岡久右衛門富政（正教、法名教西）といい、代々仮名の久右衛門を襲名しました。加島屋は近世を通じて大名貸しもおこない隆盛をきわめたのです。

天保七年（一八三六）の「日本長者分限帳」（長者番付）では小結として本店五一か所、出店一八三か所、金蔵・石蔵数知れず、地面三〇〇か所と、その富豪ぶりを示しています。明治維新では新政府の巨額な御用金を用立てるなど明治政府と接近、加島銀行の創設や大同生命保険株式会社の初代社長に就任するなど、廣岡財閥へと発展しました（宮本又次

『大阪町人』弘文堂刊、一九五七年）。

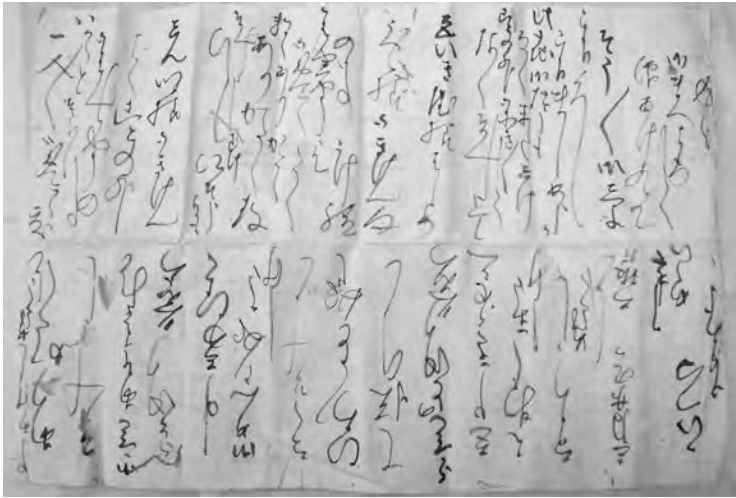
「長御殿御日次之記」寛文十二年（一六七二）七月四日条（史料研保管）を見ると、教西が大坂津村総代となっていて、本願寺および津村別院にとって重要な人物でした。

富政の妻「妙意」の手紙を、二〇一五年、研究所の保管文書より発見しました。もともと女性の手紙は、女性が歴史の裏側に埋没していくため、伝来するものも多いとはいえません。女性でも伝来するのは、歴史上の有名人や表舞台に出た人物のものです。ましてやこのような庶民で、また大豪商初代の妻の手紙は、なかなか発見されるものではありません。今回はその発見された史料の紹介と解説をして、史料的价值を明らかにしてみます。

二 加島屋「妙意仮名消息」の

翻刻と文意

ここでは「妙意仮名消息」（写真1）



1 妙意仮名消息

の翻刻及び文意を説明しておきます。なお翻刻の①②……は読む順番です。散書のように書かれてあり、読む順がわかりにくくなっています。また翻刻は原本通り改行しています。

なお料紙の法量は縦二九・七センチメートル、横四四・五センチメートル、紙

質は楮紙です。

【翻刻】

- ① 返く
- ② 御まへよろ
- ③ 被下候へく候、
- ④ 此御地御たうも
- ⑤ この外、御にきくしく
- ⑥ なく、かたしけ
- ⑦ なく、かたしけ
- ⑧ なく、かたしけ
- ⑨ なく、かたしけ
- ⑩ なく、かたしけ
- ⑪ しん門様御きけん
- ⑫ よく、ことの外
- ⑬ 御はんしやうの事、
- ⑭ いか、とそうく
- ⑮ 一入く御めて度
- ⑯ 申あげ候、めてたく、か
- ⑰ ありかたく
- ⑱ そんなし申候、
- ⑲ 御意あそはされ候
- ⑳ 御とをり、久右衛門
- ㉑ 事、しゆひよく
- ㉒ 御めん被成、かたしけ
- ㉓ なく、かたしけ
- ㉔ ひろくと成申候
- ㉕ て、悦まらせ候
- ㉖ 御意のとをり、久右衛門
- ㉗ 丕申きかせ候へ
- ㉘ は、数くかたしけ
- ㉙ なく申候、
- ㉚ なく、かたしけ
- ㉛ なく、かたしけ
- ㉜ なく、かたしけ
- ㉝ なく、かたしけ
- ㉞ なく、かたしけ
- ㉟ なく、かたしけ
- ㊱ なく、かたしけ
- ㊲ なく、かたしけ
- ㊳ なく、かたしけ
- ㊴ なく、かたしけ
- ㊵ なく、かたしけ
- ㊶ なく、かたしけ
- ㊷ なく、かたしけ
- ㊸ なく、かたしけ
- ㊹ なく、かたしけ
- ㊺ なく、かたしけ
- ㊻ なく、かたしけ
- ㊼ なく、かたしけ
- ㊽ なく、かたしけ
- ㊾ なく、かたしけ
- ㊿ なく、かたしけ

⑳ (目出度)めてたく

㉑ かしく

大坂より

三月廿九日

(加島屋)かしまや

妙意うい

かいつさま(様)

御(披露)ひろう

【文意】

早々とお手紙を頂き、実に有り難く感謝致しております。栄儀院様を始め、寂如様・幸君様、ご機嫌よくご繁昌のことたいへん目出度く有難く思っております。さらに日頃より住如新門様も御機嫌よく、ことのほかご繁昌な様子、ひとときわ目出度く有難く思っております。

寂如宗主の御意を受け賜り、廣岡久右衛門正吉は、都合よく運び免許をして頂き、たいへん感謝しております。広々となり本当に喜んでおります。寂如宗主の御意のとおり、久右衛門正吉

へ申して頂ければ、計り知れぬ程有難いことです。本当に目出度いことです。以上。

返す返す、寂如宗主ほかへ、よろしくお伝えください。当地（大坂）の御堂（津村別院）もたいへん繁昌して、本当にうれしく感じつつ申し訳もないほどです。ご様子いかがと急ぎ申しあげました。目出度きことに存じます。以上。

*人物解説

栄儀院

福姫、西本願寺第一三代良如宗主娘、母吉、本善寺円空妻、寛文五年（二六六五）四月二十四日祝言、正徳三年（一七一三）二月十六日没

上く様

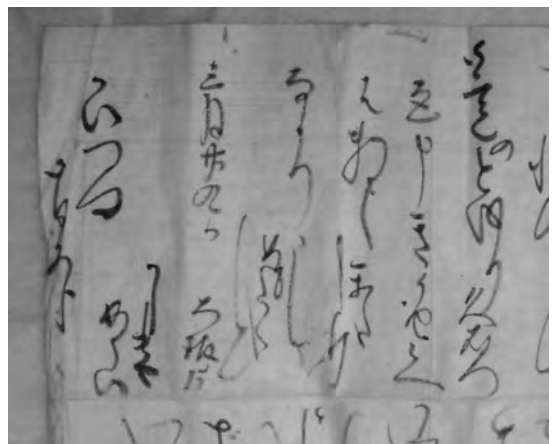
西本願寺第一四代寂如宗主や妻幸君を指すか

新門

住如宗主、元禄二年（一六八九）十一月十七日得度、西本願寺第一五代

三文書の解説

本文書は妙意が「かいつ」「[海津]カ」宛に発給した仮名消息です。妙意とは、文書署名部分に「大坂」「かしまや（加島屋）」（写真2）とあり、文中に「久右衛門」とみえるので、大坂の大豪商加島屋初代教西の正妻妙意に間違いありません。なお「妙うい」と署名され、「妙」と「う」で「みょう」と読まされています。



2 署名部分拡大

これは彼女の独自の書き方です。

本文書は法名妙意を名乗っており、後家としての出家後の作成と考えられます。したがってこの段階で夫教西は没していると考えられるので、本文の「久右衛門」とは二代の正吉と思われます。総合的に見て本文書は、元禄三年（一六九〇）三月二十九日から元禄十三年（一七〇〇）五月四日の間に発給されたものと考えます。

また俗名は最近「禄」という見解が示されています（大同生命HP「発見！加島屋当主と妻の手紙」。生まれ年は不明で、元禄十三年（一七〇〇）五月四日に没しています。また「かいつ」は本願寺の女官と思われます。

内容は妙意が西本願寺から来た手紙に對し返答したものです。私的な手紙ですので、判然としない箇所もありますが、ここには西本願寺側の人々の息災を祝い、次いで久右衛門の何かの免許のお礼を述べています。免許されたものは不明ですが、免許が続いて広々となったこと

を喜んでいるので、空間に関するものでしょう。

例えば、道場とか、あるいは追伸で津村別院（大阪市）のことと思われる記述があるので、別院の修復か何かに関わることもかもしれません。加島屋は津村別院の講中総代を務めていることから可能性はあります。ちなみに津村別院は元禄六年（一六九三）正月に敷地拡張および再興に着手しており、文書発給の年代にも齟齬はありません。

四 初代文書の珍しさ

さて話はかわりますが、江戸時代の日本の人口の推移は次のようになります（北海道・沖縄は江戸時代日本国に編入されていらないので除く）。

一六〇〇年 約一二〇〇万人
一七〇〇年 約三〇〇〇万人
一八〇〇年 約三二〇〇万人

この数値をみれば、一六〇〇年から一七〇〇年にかけて、人口が二倍になって

いることがわかります。これはどうしてでしょうか。戦国時代が終焉し江戸時代に入ると社会は安定し、殺し合うエネルギーはすべて生活に向けられます。それは農業であり、商品生産、流通でした。

この結果、庶民の生活は以前より安定し、結婚しやすい環境が整い、家族形成が促される条件が成立します。つまり「家」が成立するのです。そしてその「家」は安定した社会において、次の世代に継承されるようになります。

戦国時代は合戦で死ぬことが多く、結婚できるか不安定で、また家族が形成されても、維持するのも難しい社会でした。それゆえ「家」が形成されても、次の世代に継承できない場合も多かったのです。

しかし江戸時代には、上記のように「家」の形成が促進され、次の世代、さらに次代に連続されるようになります。この「家」の形成は「家」の創始者（初代）は、江戸時代前期（一六三〇～一七〇〇年頃）に出現した人たちです。

その初代の後、「家」が継続され、およそ三代目（一七〇〇年前後に当たる）に至ると、「家」は安定的な状態となるのです。前記した人口が一〇〇年間に爆発的に増加したのは、「家」の安定的継続が背景にあったのです（鬼頭宏『日本の歴史一九 文明としての江戸システム』講談社、二〇〇二年）。

夫婦で形成してきた「家」が、今回の加島屋のように大きく発展するのは一般的に次代、次次代でした。普通、有名人や、ある程度社会的に有力になった場合、手紙を受け取った側も大切に残す、それゆえ古文書などが伝来するのです。したがって有名になっていない初代の文書は残存しにくいのです。さらに女性には戦国時代以後表舞台から消え、一層残りにくい状況にあったのです。このような条件下で豪商初代の、それも妻の手紙が残ったのは稀有なことなのです。

五 西本願寺の史料での 廣岡家の記事

初代教西が没した約二ヶ月後、延宝八年（一六八〇）十月十三日、二代目久右衛門正吉（心西）が、父初代教西死去の志銀子二〇貫文目、金子一〇〇両を西本願寺に献上したことが日記で確認できます。その時、二代目は小広間で寂如宗主から、返礼として盃と菓子を受けています。多額な志と思われれます。これからも、両者の関係の深さが知られます。

『諸国江遣書状留』延宝五年（一六七七）八月二十七日条には、大谷本廟（京都市）に用いる木材調達について、西本願寺家臣富島と横田から書状が発給されています。次に管見した日記で、初代加島屋教西の記事をあげると、教西は、季節の礼、節句の祝儀などで西本願寺に参り献上しています。

寛文十二年（一六七二）八月朔日（一日）条

八朔の祝儀として鯿一尾・小鯛五枚・からすみ二つ、進上

寛文十三年（一六七三）正月十五條

正月のお礼に参上、生鯛二枚進上

延宝五年（一六七七）七月四日條

煎物一籠、進上

また妙意三回忌に二代目正吉が西本願寺へ「読経」を依頼し、寂如宗主が出席勤行している日記記事があります（長御殿御日次之記）元禄十五年「一七〇二五月四日條」。その時の志は金五〇両。現在のお金に換算して約二〇〇万円です（一両四〇万円換算）。

正吉が母の三回忌のため多額の上納を行い、読経を宗主みずから勤めた点を見ても、加島屋が特別な位置にあるように思えます。丁寧なみれば、もつと記事は出てくるでしょう。いずれにしても加島屋・廣岡家および初代教西は、西本願寺にたいへん深く関わり成長してきたと思われるのです。

六 おわりに

江戸時代、女性の地位は低下し公的な場より消えていきました。そのような中、江戸時代前期の女性の手紙が伝来することとは貴重な事例と再三指摘しました。さらに女性の手紙でも多く残るのは、権力者側の女性の手紙という事実には照らし合わせる、「妙意仮名消息」は大豪商初代の妻の手紙という意味においてもたいへん珍しいとも説明してきました。

さてこの妙意から約二〇〇年を経て、高視聴率のテレビ番組主人公のモデルとなった廣岡浅子が登場します。明治の女傑として大同生命株式会社や日本女子大学設立などに尽力し時代を牽引しました。ここだけを見ると、浅子が特別な人に見えますが、必ずしもそう思いません。女性は表舞台から姿を消したものの、いなくなったわけではありません。実は夫とともに「家」を形成し維持していたのです。つまり妻がいなければ、「家」

は存続できなかつたのです。表おもてに出ない場所で、女性は活躍し重要な役割を果たしてきたのです。これは江戸時代の女性に共通することなのです。

明治Ⅱ近代になり封建制のたがが緩む時、江戸時代から表面化せず活躍してきた女性の幾人かは、表舞台に姿を現すようになり活躍するようになったのです。あくまでもその内の一人が浅子であったのです。

おおよそこれまで加島屋の史料といえ、経営の史料Ⅱ表の史料がほとんどでした。このなかで妻の手紙や西本願寺との関係史料を追えば、経営史ではない、加島屋という大豪商の私的な生活や実態が浮かびあがり、これまでにない新たな商人の側面が見えてくると思われます。

(本願寺史料研究所 上級研究員 大喜直彦)